

猪垣と水車を活かした地域づくり

——和歌山県那智勝浦町高津気区の事例より——

浜口 尚・鳥井 一寿

1. はじめに

1999 (平成 11) 年 7 月、「町村の合併の特例に関する法律」(1965 年制定) が一部改正され、合併特例債の創設など市町村合併を推進する財政支援措置が用意されたため、その後全国的に「平成の大合併」といわれる市町村合併の動きが高まっていった(地図情報センター 2006: 19)。

1999 (平成 11) 年 3 月 31 日において全国に 3232 あった市町村は、合併特例債による財政支援措置が終了した 2006 (平成 18) 年 3 月 31 日には 1821 となり、合併にかかるその他の特例措置が終了する 2010 (平成 22) 年 3 月 31 日には 1753 になる予定である¹⁾。

昭和の大合併、平成の大合併と「行政の効率化」、「財政の健全化」の名の下に何度も繰り返されてきた市町村合併の結果、全国の周縁地域においては少子高齢化と相俟って過疎化が進んできた。多くの市町村においては合併が過疎に一層の拍車をかけるのがわかっていても、合併せざるをえない状況に追い込まれているのである。

このような社会情勢の中、全国各地においては過疎に歯止めをかけようと様々な地域づくり事業が実施されている。本稿においては和歌山県那智勝浦町高津気区の「猪垣と水車を活かした地域づくり」を取り上げ、同地の地域づくり、観光振興について以下の手順で考察する。

まず、那智勝浦町と高津気区の概要を説明する。つぎに、近世以降イノシシなど害獣の農地への侵入を防ぐために構築されてきた猪垣を題材にして、高津気区民と同地の猪垣との関係を報告する。さらに、高津気区における猪垣をめぐるウォーキング・ツアーおよび水車復活による地域景観の魅了事業を取り上げて、同地における地域づくりについて検討する。最後に、猪垣と水車を活かした地域づくりの問題点を指摘し、本稿のまとめとする。

2. 那智勝浦町と高津気区の概要

2.1. 那智勝浦町

本稿で取り上げる和歌山県東牟婁郡那智勝浦町は熊野灘に面した紀伊半島南東部に位置する面積 183.45 km² (那智勝浦町 2006: 8)、人口 1 万 8153 人 (2008 年) の地方自治体である [図 1]。同町の沿革は次のとおりである。

情報センター 2006: 19)。

このような市町村合併への流れを受け、那智勝浦町も新たなる合併を模索、当初は同町が海岸線を除いて包摂する形となっている太地町との合併をめざし [図 1]、2003 (平成 15) 年 7 月に同町との間で法定合併協議会を設置したが、翌 2004 (平成 16) 年 7 月に同協議会が解散となり、合併断念に至っている²⁾。

その後、那智勝浦町は同町北側に隣接する新宮市との間で合併交渉を開始し [図 1]、2008 (平成 20) 年 12 月に法定合併協議会を設置、2010 (平成 22) 年 3 月 23 日の合併をめざすとしていた³⁾。しかしながら、2009 (平成 21) 年 8 月 9 日に実施された住民投票において合併反対票が 78% を占め⁴⁾、合併を推進していた町長は合併断念および次期町長選挙への不出馬を表明⁵⁾、翌 9 月 13 日に実施された町長選挙において単独町制を担う新町長が選出されている⁶⁾。

那智勝浦町が現在の姿となった 1960 (昭和 35) 年の人口は 2 万 5775 人であったが、2008 年 (平成 20) 年には 1 万 8153 人となり、半世紀近く人口減少が続いている [表 1]。2003 (平成 15) 年、同町の合計特殊出生率 1.21、高齢化率 28.4% と前者は全国平均 1.29 を下回り、後者は全国平均 19.0% を大きく上回っている (那智勝浦町 2006: 10)。同町によれば、今後も人口減少は続き、2015 (平成 27) 年には人口 1 万 7091 人になると見込まれている (那智勝浦町 2006: 16)。

那智勝浦町は地形的に山地が多く、町土 183.45 km² のうち 161.03 km² (87.8%) を森林が占めており (那智勝浦町 2006: 16-17)、一部の沿岸部を除いて平地は少ない。このような自然環境要因が土地利用、産業振興に制約を与えている。

2005 (平成 17) 年の産業別就業者数合計 8082 人のうち、第一次産業 482 人 (6.0%)、第二次

表 1 那智勝浦町および高津気区人口動態

年		那智勝浦町		高津気区	
		世帯数	人口	世帯数	人口
1628	寛永 5	-	-	47	258
1889	明治 22	-	-	59	305
1960	昭和 35	6,209	25,775	-	-
1985	昭和 60	7,877	22,248	-	-
1990	平成 2	8,064	21,428	63	192
1995	平成 7	8,304	20,652	57	144
2000	平成 12	8,525	20,022	54	126
2005	平成 17	8,569	19,005	48	100
2008	平成 20	8,451	18,153	48	89

(出典)

1628 年、1889 年は那智勝浦町史編纂委員会 (1976: 13, 14, 64, 66) による。

1960 年、1985 年は国勢調査 (10 月 1 日) による。

1990 年、1995 年、2000 年、2005 年、2008 年は住民基本台帳 (4 月 1 日) による。

産業 1178 人（14.6%）、第三次産業 6410 人（79.3%）、分類不能 12 人（0.1%）となっており、第三次産業の中でもサービス業が 3647 人（45.1%）と傑出している（那智勝浦町 n.d.: 2）。全体として人口減少、過疎化が進む同町にあって、南紀勝浦温泉がもたらす観光業が多く就労機会を提供し、産業の中心となっているのである。

那智勝浦町の『第 7 次長期総合計画』（2006 年）には「今後観光事業など地域の個性を活かした産業振興や積極的な企業誘致による就業機会の創出、快適な住環境の整備によって若者の定住化を促進することができれば、人口減少傾向に歯止めをかけることができる」（那智勝浦町 2006: 16）とあり、同町の観光業にける期待は大きい。

2. 2. 高津気区

高津気区は那智勝浦町の北東部に位置し、新宮市に隣接〔図 1〕、面積 5.15 km²⁷、世帯数 48 戸、人口 89 人（2008 年）〔表 1〕の中山間地域である。地区の産業としては農林業が主体であるが、近年の道路整備の結果、町中央部まで自動車でも 15 分程度となったため⁸⁾、区外への通勤者（およびその退職者）も多い⁹⁾。

高津気区の来歴は古く、平安朝の頃からその存在が報告されている（那智勝浦町史編纂委員会 1976: 10）。高津気の名前が現れる正確な文献として、1628（寛永 5）年の『郷帳』（村の統計）があり、そこには家数 47 軒、人口 258 人（男 126 人、女 132 人）、牛 22 匹^(ママ)などと記録されている（那智勝浦町史編纂委員会 1976: 13-14）。

1889（明治 22）年 4 月、高津気村、宇久井村、狗子ノ川村 3 村の合併により宇久井村が発足し（那智勝浦町史編さん委員会 1977: 78）、その宇久井村ほか 3 町村が 1955（昭和 30）年に合併して那智勝浦町が誕生したのは上述のとおりである（2. 1. 参照）。

現在、那智勝浦町は旧町村ごとに宇久井地区、那智地区、勝浦地区、色川地区、太田地区、下里地区の 6 地区に大別され、その宇久井地区内の 9 区の一つが高津気区となっている¹⁰⁾。

高津気区には区長、副区長、会計など 5 人の区役員があり、同役員が中心となって年 1 回、正月に区総会を開催すると共に 1 月の神明祭（地元の神明神社の祭り）、2 月の初午、6 月の早苗饗、8 月の八朔、11 月の山の神の祭り、新嘗祭などの伝統行事を執り行っている。早苗饗、八朔、新嘗祭などは、かつては日本の農村地帯一円において実施されていた神祭りであり、それらの神事が人口減、過疎化が進む中、今日まで受け継がれていることは同区の共同体意識の強さを物語っている。

3. 猪 垣 考

3. 1. 野生鳥獣類による農作物被害とその対策

近年、イノシシ、シカ、サルほかの野生鳥獣類による農作物への被害は著しい。2007（平成 19）年度、日本全国における野生鳥獣類による農作物被害総額は 184 億 9478 万円、そのうちイ

表2 農作物鳥獣被害状況－2007年度－

	全 国		和歌山県		那智勝浦町	
	金額(万円)	構成比(%)	金額(万円)	構成比(%)	金額(千円)	構成比(%)
イノシシ	501,184	27.1	12,349	41.7	5,745	37.3
シカ	468,039	25.3	3,627	12.3	5,464	35.5
サル	160,305	8.7	6,370	21.5	3,898	25.3
その他	719,950	38.9	7,260	24.5	287	1.9
鳥獣類計	1,849,478	100.0	29,606	100.0	15,394	100.0

(出典)

全国および和歌山県は農林水産省「野生鳥獣による都道府県別農作物被害状況」(平成19年度)による¹¹⁾。

那智勝浦町は同町ホームページ「鳥獣被害防止計画について」による。

23 March 2009 <<http://www.town.nachikatsuura.wakayama.jp/lifeinfo/sangyou/index.html>>

ノシシによる被害は50億1184万円、シカ同46億8039万円、サル同16億305万円となっている¹¹⁾ [表2]。

イノシシの生息数はおおよそ5年で4倍、シカは約6年で2倍となり、イノシシの場合、生息数を減少させるためには、その30%以上を毎年捕殺する必要があるとされている(井上・金森2006: 51)。2003(平成15)年度から2005年(平成17)年度までの3年間にイノシシは69万3533頭(年間平均23万1178頭)、シカは52万6661頭(年間平均17万5554頭)とかなりの数が捕殺されているが、同3年間のイノシシによる農作物被害は154億8800万円(年間平均51億6300万円)、シカは同117億4600万円(年間平均39億1500万円)と高額で推移している¹²⁾ [表3]。

このようなイノシシ、シカによる農作物被害の大きな要因となっているのが減反政策による耕作放棄田の存在である(江口2003: 27, 132; 井上・金森2006: 75-76)。耕作放棄田が回廊となり、山から里にイノシシやシカが人間と出会うこともなく安全に降りてくることができ、またほとんど危害を加えられることもなく農作物を食せるからである。

中山間地域における少子高齢化と政府の減反政策が相俟った結果が広範囲に存在する耕作放棄

表3 イノシシ・シカ、捕殺数・被害額－2003～2005年度－

年度		イノシシ		シカ	
		捕殺数	被害額(百万円)	捕殺数	被害額(百万円)
2003	平成15	209,802	5,010	161,070	3,950
2004	平成16	268,019	5,592	174,467	3,912
2005	平成17	215,712	4,886	191,124	3,884
計		693,533	15,488	526,661	11,746

(出典)

捕殺数はフィデリ「鹿肉・猪肉の出荷・流通・消費状況」による¹²⁾。

被害金額は農林水産省「野生鳥獣による農作物被害状況の推移」による¹²⁾。

田（畑）である以上、イノシシやシカから農作物被害を防ぐには多くの困難を伴うのである。

イノシシによる農作物被害を防ぐ対策としては「イノシシがいやがる環境をつくる」「田んぼ、畑を効果的に囲う」「適切な駆除を行なう」（江口 2003: 125）ことが、シカによる同様の対策としては「できるだけ餌をなくす」「柵で囲う」「人間や車は怖いと思わせる」（井上・金森 2006: 117）ことが重要であるとされている。

いずれも田畑を囲う防御柵が有効な農作物被害防護策の一つとして考えられているのである。この防御柵、実は近世以来「猪垣」あるいは「鹿垣」として日本各地において幅広く用いられてきたものであった。以下、この「猪垣」を中心にして考察を進めていく。

3.2. 猪垣概要

江戸時代以降、耕地開発が進むにつれてイノシシによる農作物被害が増大していく（岡本 1992: 147）。そのイノシシによる農作物被害を防ぐべく、イノシシを全滅させた例が長崎県対馬にある。対馬藩の郡奉行、陶山訥庵は農業生産向上のため、対馬においてイノシシ撲滅作戦を実施し、1700（元禄 13）年から 1709（宝永 6）年までの 9 年間にイノシシ 8 万余頭を捕殺したとされている（矢ヶ崎 2001: 124）。

イノシシを全（絶）滅させれば、もちろんイノシシによる農作物被害はなくなるが、相手も生き物、追われれば逃げる。陶山訥庵によるイノシシ撲滅作戦も対馬という離島であったからこそ可能であったのであり、本州や四国、九州など空間的な広がりをもつ地域においては現実的な方策ではない。

イノシシの耕作地への侵入に対して捕殺できないのであるならば、侵入を防ぐしかなく、侵入を防ぐための猪垣が江戸時代以降、西日本を中心に作られていくのである。

猪垣には田畑の周りを囲うように垣を構築する事例と、集落と田畑を山から切離すように山と平地の境に垣を構築する事例があり、前者を囲繞型（城郭型）、後者を分界型（長城型）と称している（岡本 1992: 152; 花井 1995: 59）。その構造としては石垣、土塁、土塀などがみられ、高さは 1～1.5 m、幅 1 m 程度、基部がやや広く、上部がやや狭くなっている（岡本 1992: 152; 花井 1995: 59）。

囲繞型の事例としては沖縄本島北部、大宜味村および国頭村の猪垣、分界型の事例としては香川県小豆島の猪垣などが有名である。

大宜味村の猪垣は文献から 1776 年以前に構築されたことがわかり、第二次世界大戦後の 1952（昭和 27）～1953（昭和 28）年に大修理がなされている（大宜味村教育委員会 1994: 1, 5）[写真 1]。同猪垣の全長は 32 km、16 部落ごとに管理区域が設定され、部落単位でその保全に当たってきたが、昭和 30 年代半ば頃に管理不能となり放棄されている（大宜味村教育委員会 1994: 7; 花井 2003: 96）。

国頭村奥地区の猪垣は内垣、外垣をあわせて延長 25 km、1903（明治 36）年に築造され、1959（昭和 34）年に放棄されている（矢ヶ崎 1993: 5, 10）。奥区民にとっては猪垣の維持管理が区民

としての最重要義務の一つで、破損箇所が発見されれば、担当箇所に応じて各区民が修理を行ってきたのである（矢ヶ崎 1993: 5, 10）。

一方、分界型である小豆島の猪垣は 1790（寛政 2）年に完成、延長約 120 km に及び、40 部落を跨いでいる（齋藤 1934: 7; 矢ヶ崎 2001: 144）。同猪垣については、1933（昭和 8）年の調査時点で、荒廃するところが多いとされている（齋藤 1934: 7）。

これらの事例のように、広域にわたって農地へのイノシシの侵入を防いできた猪垣も、その多くは昭和 30 年代半ば頃までに当該地域からの人口流出などにより維持管理が不可能となり、放棄されていったのである。

これに対して、2003（平成 15）年まで地域住民によって維持管理されてきた猪垣がある。それが次に取り上げる高津気区の猪垣である。

3.3. 高津気区の猪垣

紀伊半島南部、和歌山県・奈良県・三重県の 3 県に跨る熊野地方においては古くから長大な分界型の猪垣の存在が知られてきた。民俗学者の柳田國男もその著作の中で紀州熊野の猪垣について触れている（柳田 1927）。

熊野地方 3 県のうち、和歌山県部分の猪垣については熊野列石研究会が 1986（昭和 61）年から 1987（昭和 62）年にかけて現地調査を実施し、70 km 近くに及ぶ猪垣の位置を地図に書き入れている（熊野列石研究会 1987）。また、三重県においても熊野市だけで約 30 km の猪垣が存在しており（岡本 1992: 165）、上述の柳田國男が昭和の初めに見た猪垣もその一部である（柳田 1927: 154）。

これらの猪垣の中で和歌山県那智勝浦町高津気区の猪垣は 2003（平成 15）年まで定期的な修復作業が行われてきたこともあって、特に保存状態がよく、古の形状を今日まで伝えている [写真 2]。同地の猪垣は一抱えほどの自然石を高さ 1.5 m、幅 1 m ぐらいに積み上げたもので、全長約 4 km、その延長上に人の出入りに利用した木戸跡が 5 か所、イノシシを落とすために掘られたシシツボ跡が 4 か所存在している（熊野列石研究会



写真 1 大宜味村の猪垣
撮影（浜口 尚、2008 年 3 月 4 日）



写真 2 高津気区の猪垣
撮影（浜口 尚、2008 年 3 月 22 日）

1987: 30)。

高津気区民よれば、毎年 8 月 17 日を「垣普請の日」と定め、破損箇所や周囲の草刈りなどの作業を共同で行なって猪垣の維持管理に努めていたのである。高津気区は 6 組（1 組、5～10 軒）に分かれており、それぞれの組が特定場所の普請を担当、少なくとも各組の 1 軒ごとに家人 1 人が作業に出る義務があった。この垣普請も地区の人口減少と高齢化に伴い、作業中に怪我人が出たら大変ということで 2003（平成 15）年を最後に廃止されたのである。今日では「電気牧柵」（電柵）が猪垣の役目を果たすべく田畑の周囲に設置されている [写真 3]。



写真 3 現代の猪垣「電気牧柵」
撮影（浜口 尚、2007 年 12 月 7 日）

前節（3.2. 参照）でみた沖縄県大宜味村、国頭村における猪垣の地元住民による維持管理作業が昭和 30 年代半ば頃に廃止されたのと比べて、この高津気区の猪垣はその後も 40 年以上手入れされてきたのである。そこに共同体を維持しようとする地域住民の連帯感の強さを読み取ることができるのである。垣普請は廃止されたとはいえ、早苗饗、八朔、新嘗祭などの農作業にかかる神祭りは今日でも執り行われている。高津気区の共同体意識はまだまだ強固なのである。

4. 猪垣と水車を活かした地域づくり

那智勝浦町は「生鮮まぐろ水揚げ高日本一」（那智勝浦町 2003: 1）という生まぐろと南紀勝浦温泉を誇る「まぐろと温泉の町」（那智勝浦町 2006: 72）であり、先にみたとおり（2.1. 参照）、観光業が町の基幹産業である。

しかしながら、2001（平成 13）年に宿泊観光客数が 100 万人を割り込んで以降、2007（平成 19）年まで同観光客数は 89 万～97 万人で推移し、宿泊客の長期漸減傾向に歯止めがかからない状況である [表 4]。

このような那智勝浦町の観光を取り巻く厳しい情勢に危機感を抱いた那智勝浦町観光協会は入り込み客の増大をめざして、ここ数年来積極的な新規集客事業に取り組んでいる。世界遺産・那智の滝の普段は立ち入ることのできない二の滝、三の滝などをめぐる「神秘ウオー

表 4 那智勝浦町宿泊観光客数

年		宿泊客（人）
1975	昭和 50	1,303,749
1980	昭和 55	1,078,424
1985	昭和 60	919,212
1990	平成 2	1,135,059
1995	平成 7	1,275,413
2000	平成 12	1,057,729
2001	平成 13	967,822
2002	平成 14	931,045
2003	平成 15	891,011
2004	平成 16	911,504
2005	平成 17	897,831
2006	平成 18	924,253
2007	平成 19	948,350

（出典）

1975～2006 年は那智勝浦町「那智勝浦町観光客動態（歴年）」による。2007 年は「平成 20 年度那智勝浦町観光協会総会資料」による。

ク)、山伏とともに熊野古道を歩く「妙法山かけぬけ道ウォーク」などである。幸いしてこれらの事業は、世界遺産・熊野古道ブームと中高年者の健康志向が相俟って、評判がよく、観光協会の年間事業として定着してきている¹³⁾。

このような背景の下、観光協会はさらなる新規事業の開拓をめざして、高津気区の猪垣を活かしたウォーキング・ツアーに取り組み始めたのである。

4.1. 熊野列石探訪ウォーク

猪垣を活かした地域づくり事業は、猪垣が存在する各地域で実施されている。例えば、大分県鶴見町（現、佐伯市）においては1990（平成2）年度に「ふるさと創生事業」を用いて、猪垣の一部を修復するとともに遊歩道を整備している（大分県教育庁文化課2001:29）。また、上述の沖縄県大宜味村においては（3.2.参照）、2007（平成19）年度に村単独事業として猪垣に至る登り口付近にイノシシのモニュメント、猪垣の説明板などを設置している¹⁴⁾ [写真4]。いずれも猪垣を地域が誇る歴史文化遺産として高く評価しているのである。

那智勝浦町の場合は行政が主体ではなく、観光協会が集客事業の一環として高津気区の協力の下、猪垣を活かした地域づくりを進めている。2007年（平成19）年度は5月と10月の2回、2008年（平成20）年度も4月と10月の2回、「熊野列石探訪ウォーク」と題したウォーキング・ツアーを実施し、2007年（平成19）年度、計91名、2008年（平成20）年度、計60名の参加者を集めている¹⁵⁾。

同ツアーは参加者各人が高津気区に集合し、熊野・那智ガイドの会所属のガイドさん（2、3人）の案内の下、2時間半程度かけて猪垣一帯を探訪するツアーである。地元区民（2、3人）が随行、安全面からのサポートを行い、調整役として観光協会関係者（2、3人）も同行している。筆者ら2人も2009年3月時点で4回（浜口）、2回（鳥井）の猪垣探訪を行なっているが、途中かなり急な上り下りもあり、決して楽なウォーキングではない。

ツアー参加者は垣普請協力金として1人100円が必要である。この協力金は高津気区の収入となる。高津気区会計担当者によれば、2007年（平成19）年度、垣普請協力金として9400円の収入があったとのことである¹⁶⁾。現在（2009年3月）のところ、ウォーキング・ツアーに関して地元への直接の還元はこの小額の垣普請協力金だけである。安全面からツアーに同行する地元区民はもちろんボランティアで無報酬である。さらに、地元区民はツアー前にはコースを見回り、枝打ち、下草刈りなど簡単な整備も行なっている。高津気区への訪問客が増えれば、地域も少しは賑やかに



写真4 イノシシのモニュメントと猪垣説明板
（大宜味村）

撮影（浜口 尚、2008年3月4日）



写真5 高架的那智勝浦新宮道路とその下の関連道路
撮影（浜口 尚、2008年2月21日）



写真6 従来からの町道
撮影（浜口 尚、2008年6月22日）

なるであろうというささやかな地域活性化への期待をもって、地元区民はツアーに協力しているのである。

もちろん大きな夢もある。2008（平成20）年3月、那智勝浦町と新宮市を結ぶ自動車専用道路、那智勝浦新宮道路が供用を開始した。この道路は高津気区の中央部を横切る形となっている。高架の自動車専用道路なので高津気区から直接利用はできないが、狭小でカーブがきつかった町道が関連道路として整備され、国道42号線から高架下までは2車線の立派な道路となった〔写真5〕。しかしながら、高架下から奥の地区は従来どおりの対向不能な道のままである〔写真6〕。

高津気区に観光客が多数来訪するようになれば（あるいは多数来訪することをめざして）、高架下から奥の地区を通る道路を拡幅し、隣接する狗子ノ川区を経て再び国道42号線に接する2車線道路とするのが大きな夢なのである。

4.2. 水車復活

元々高津気区は田んぼとその周囲の土手に咲く彼岸花が美しい地域であった。しかしながら、減反政策や高齢化が相俟って、所々に休耕田や耕作放棄地が目立つようになり、かつての景観を失いつつある。このような状況を改善すべく、観光協会が主体となり、地元区民に協力を依頼して、猪垣に至る道沿いの休耕田、耕作放棄地にれんげ草や菜の花の種を播き、季節ごとに花を咲かせることにより、景観美化に努めている〔写真7〕。

さらに観光協会は2007（平成19）年度、和歌山県山村振興対策協議会の山村地域活性化事業助成金の交付を受けて水車を製作¹⁷⁾、休耕田に設置することにより、かつての田園風景の甦りを図っている。高津気区においては昭和30年代の初め頃まで水車が米搗きに用いられていたのである。2008（平成20）年度は、観光協会の自主財源で前年完成した水車の横に水車小屋を建築し¹⁸⁾、その中で米搗きができるようにしたのである〔写真8〕。このように観光協会の手による高津気区の地域づくりは着々と進んでいるのである。



写真7 休耕田に咲く菜の花
撮影（浜口 尚、2008年2月20日）



写真8 完成した水車と水車小屋
撮影（浜口 尚、2008年8月30日）

4.3. 学生ウォーキング・ツアー

2008（平成20）年11月、園田学園女子大学短期大学部生活文化学科2年次生7名と筆者ら教員2名の計9人のメンバーにより、授業の一環として1泊2日の日程で高津気区への「猪垣と水車をめぐるウォーキング・ツアー」を実施した。

参加学生は生活文化学科の開講科目「健康トレーニング」（担当：鳥井）の受講生の一部である。同科目はキャンプ実習、海洋実習、スキー実習などの野外活動に親しむことによって体を動かすことの楽しさを体得する授業である。2008（平成20）年度は2010（平成22）年度に生活文化学科に設置が計画されている「健康生活コース」の準備を兼ねて試行的にウォーキング実習を取り入れたものである。

現地においては地元区民2名、熊野・那智ガイドの会所属のガイドさん2名、観光協会関係者1名が同行し、約2時間かけて水車、猪垣などを探訪した〔写真9〕。参加学生7名に対して、引率教員2名、地元サポート5名と安全面には十分配慮し、健康的で安全なウォーキングを心がけた。

ウォーキング終了後は南紀勝浦温泉に宿泊し疲れを癒した。もちろん授業の一環であるので、湯浴み前に反省会を開き、ウォーキング・ツアーに参加した感想、得られた成果などを語り合った。同時に全体的な印象・感想を知るためのアンケート調査も実施した。以下がアンケート調査結果の筆者らによる総括である。

- 1) 学生にとってウォーキング自体は急な上り下りや険しい道もあり結構疲れたようであった

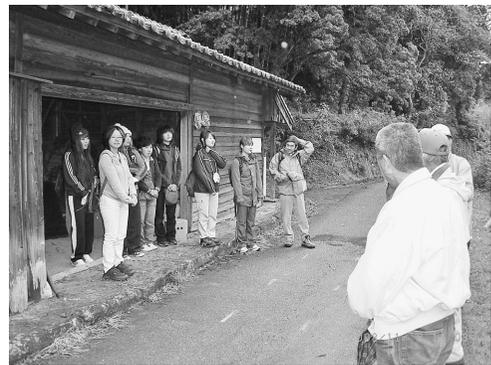


写真9 高津気区民の説明を聞く生活文化学科の学生
撮影（浜口 尚、2008年11月8日）

が、様々な草花や樹木、奇岩などの自然環境に接することができ、心身を健康にする実習となった。

2) 水車や猪垣については、ガイドさんおよび地元区民による水車の仕組み（米搗きの方法など）や猪垣の来歴、伝承などの詳細な説明により、単なる見学にとどまらず、生活環境、文化遺産をめぐる「経験値教育。」（本学の教育方針）となり、非常に意義深かった。

3) ガイドさんの正確な知識と説明力および地元区民の熱意が学生の高津気区に対するよいイメージの形成に大きく貢献した。参加学生はガイドさん、地元区民の熱心な説明に非常に感動していた。

また、高津気区の関係者およびガイドさんからは「今までのウォーキング・ツアーは年配の方が多かった。今回は若い女性が来てくれたので、それだけで華やいだ」との感想を頂いた。若い女性が繰り返し訪れる地域となれば、来訪者の幅が広がり、数も増える。そのためには同区において若い女性への魅力アップを図ることが重要である。今回のウォーキング・ツアーが高津気区において若い女性を誘引する方策を検討するきっかけとなれば、筆者らにとってもうれしい限りである。本ツアーは学生教育に大きな意義があっただけではなく、高津気区の地域づくりにもささやかな貢献をなしたと筆者らは考えている。

5. おわりに

最後に本稿で取り上げた那智勝浦町高津気区の「猪垣と水車を活かした地域づくり」に関して筆者らが問題と考える点を指摘しておく。

まず、誰がガイド役を務めるかについてである。現在、観光協会などの主催で実施されている高津気区へのウォーキング・ツアーの場合、熊野・那智ガイドの会所属のガイドさんがガイド役を務めている。ガイドさんの説明は熱心で評判もよく、それ自体に問題は無い。ただ、ガイドさんは高津気区以外の方である。文献資料および高津気区民から猪垣や地域文化について学び、それに基づいて説明を行なっている。個別事象については高津気区で生まれ育った方のほうが詳しい場合もある。もちろん、ガイドさんの説明には知識の深さ以上にツアー客を楽しませるエンターテインメント性が要求される。聞いていて楽しい説明のやり方が求められるのである。当然、パフォーマンスも必要である。そこにプロであるガイドさんと地元区民の違いがある。いきなり地元区民にそのパフォーマンスを要求するわけにはいかないが、本来ガイド役は地元区民のほうが適しているはずである。地元区民から専門のガイドさんを養成していくシステムを作り上げていく必要がある。

実はガイドさんの問題にはお金の問題も絡んでくる。ガイドさんは仕事としてツアーに同行し、報酬を得ている⁹⁾。ツアーに同行し、サポート役を務める地元区民はボランティアで無報酬である。地域と文化と知識を提供し、報酬は（小額の垣普請協力金を除いて）地元区民以外の手

に落ちる。筆者らはそこに割り切れないものを感じるのである。地元区民から直接この割り切れないさにかかる話を聞いたわけではないが、地元区民がガイドさんとなれば、この問題の一部は解決するはずである。

つぎは、やがて仕掛け人としての役目を終了するであろう那智勝浦町観光協会の後継役（組織あるいは個人）の問題である。観光協会は2007（平成19）年度より3年計画で高津気区の地域づくりに取り組んでいる²⁰。その計画に従い、2007年（平成19）度は山村地域活性化事業助成金の交付を受けて水車を製作、休耕田に設置し、2008（平成20）年度は観光協会の自主財源で水車の隣に水車小屋を建築している（4.2.参照）。2009（平成21）年度は那智勝浦町観光地魅力アップ推進委員会の予算で猪垣に至る足場の整備などを予定している²¹。

観光協会としては3年間の事業期間中に高津気区の基盤整備と観光地としてのPRを行い、その後は地元区主体の地域づくり、観光振興を期待しているようであるが、事業経費などの予算措置については補助金・助成金などに関する知識と事務処理能力が要求される。これもガイドさんの育成と同様、一朝一夕にはいかないものである。高津気区において地域振興の受け皿となるべき組織および人材の早急な育成が課題である。

最後は行政、すなわち那智勝浦町役場との関係である。先にみた大分県鶴見町（現、佐伯市）および沖縄県大宜味村における猪垣を活かした地域づくり事業においては、いずれも行政が事業主体として積極的に関わっていた（4.1.参照）。行政が関与することによって予算面ほか事業実施に向けての厄介な問題の大半は解決するのである。

これに対して、那智勝浦町の場合、高津気区という町内の地域振興に役場が全く関わっていない。このことに筆者らは常々疑問を抱いていた。その疑問を町の観光振興担当者に尋ねてみたところ、「従来、町の観光施策は入湯税収入を目的としたもので、大手ホテルを対象として展開されてきた。今日においても、その従来の考え方から抜け切れていない。高津気区の猪垣、水車を利用した地域づくりを町が支援して町の観光振興に結びつけていこうという段階にまではきていない²²」という回答を得て、妙に納得してしまった。

2007（平成19）年度の入湯税収入は1億1430万円、町税収入の約6.5%を占めている²³。間接税であるから、税収は楽に確保される。限られた町予算で税収を確実に増やすためには、地域づくりよりも大手ホテルの宿泊客の増加を考えるほうがよい。行政としては正しい判断なのかもしれない。

加えて、那智勝浦町は2009（平成21）年8月9日に実施された住民投票の結果を受けて新宮市との合併を断念した（2.1.参照）。単独町制を選択した以上、大胆な行財政改革が求められている。人口100人を割った町内1区への積極的な財政支援は期待できないであろう。結局のところ、高津気区は観光協会のみならず行政からも自立していかざるを得ないのである。

以上、3点ほど高津気区の地域づくりにかかる問題を指摘してみた。これらについては、今後筆者らも含めて考えていくべき課題として提示しておきたい。

本稿読了後、地域づくりによって過疎化の進行を食い止め、何とか将来に明るい展望を見出そ

うと努力している一地域の今日的状況にご理解いただき、共に地域活性化について考えていただければ筆者らとしては幸甚である。

付記

本稿執筆にかかる和歌山県那智勝浦町高津気区における現地調査は2007年9月から2009年3月までの間に計23回(28日間)実施した。そのうち20回(22日間)は浜口が単独で、3回(6日間)は浜口と亀井が共同で実施した。調査費用は基本的に園田学園女子大学から支給される個人研究費を用いた。

現地調査に際しては、高津気区・現区長の瀧本清吉さん、前区長の小岩研作さん、元区長の青木崇甫さんをはじめ地元の方々にお世話になりました。また、那智勝浦町観光協会の外山靖夫会長、亀井眞一事務局長にもご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

注

- 1) 数値は総務省ホームページ「合併相談コーナー」による。
24 Sep. 2009 <<http://www.soumu.go.jp/gapei/gapei.html>>.
- 2) 和歌山県総務部市町村課合併推進室「旧合併特例法下での経過」。
3 March 2009 <http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/010600/gyousei/H18No2/keika/kyuu_hou.html>.
- 3) 『紀伊民報』2008年12月18日付、同2009年6月23日付。
- 4) 合併反対8165票、合併賛成2307票(『毎日新聞』2009年8月10日付)。
- 5) 『毎日新聞』2009年8月11日付。
- 6) 『毎日新聞』2009年9月14日付。
- 7) 那智勝浦町提供資料による(2008年3月29日)。
- 8) 那智勝浦町役場前から高津気区中央部まで、筆者自身の運転による普通乗用車で往路、復路とも14分であった(2008年12月28日)。
- 9) 地元での聞き取り調査によれば、区外への通勤者は16人であった(2009年3月27日)。
- 10) 那智勝浦町提供資料による(2009年7月10日)。
- 11) 農林水産省「野生鳥獣による都道府県別農作物被害状況(平成19年度)」
4 March 2009 <http://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/h_zyokyo/h19/pdf/ref_data02.pdf>.
- 12) 農林水産省「野生鳥獣による農作物被害状況の推移」
4 March 2009 <http://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/h_zyokyo/h19/pdf/ref_data03.pdf>.
フィデリ「鹿肉・猪肉の出荷・流通・消費情報」
6 March 2009 <<http://db.fideli.com/db/samplepdf/s2941.pdf>>.
環境省「鳥獣関係統計」
6 March 2009 <<http://www.sizenken.biodic.go.jp/wildbird/flash/toukei/07toukei.html>>.
2009年3月時点において、農林水産省の野生鳥獣類による農作物被害に関する統計は2007(平成19)年度まで入手可能であるが、環境省の野生鳥獣類捕殺数統計は2005(平成15)年度までである。それゆえ、表3では2005(平成15)年度までしか取り扱えていない。
- 13) 那智勝浦町観光協会事務局長の説明による(2008年1月26日)。
- 14) 事業費はイノシシのモニュメントおよび猪垣説明板の制作費162万円、施工費ほか関連事業費90万円、計252万円である。大宜味村教育委員会担当者の説明による(2008年3月4日)。
- 15) 那智勝浦町観光協会提供資料による(2008年2月20日)。
- 16) 2回のウォーキング・ツアー参加者は計91名であるので、1人100円の垣普請協力金では計9100円となり、9400円と若干の差額が出る。2回のウォーキング・ツアーに加えて、12月に高校社会科教員研修ツアーも実施しているので(参加者5名)、垣普請協力金の合計が多少増えたのであろう。
- 17) 山村地域活性化事業助成金100万、自主財源9万円、計109万円の予算で水車を製作、設置すると

- に簡易トイレも購入、設置した。那智勝浦町観光協会提供資料による（2008年9月21日）。
- 18) 水車小屋建築費 33 万円。那智勝浦町観光協会提供資料による（2008年9月21日）。
 - 19) 団体客（30名まで）の場合、ガイド料金 8000 円、個人客の場合、同 4000 円。熊野・那智ガイドの会事務局資料による（平成 19 年 5 月 19 日付）。
 - 20) 那智勝浦町観光協会事務局長の説明による（2007年12月26日）。
 - 21) 那智勝浦町観光協会事務局長の説明による（2008年12月12日）。
 - 22) 那智勝浦町産業課、観光振興担当者の説明による（2008年11月21日）。
 - 23) 那智勝浦町提供資料による（2008年12月12日）。なお、過去の町税収入に占める入湯税の割合は 1989（平成元）年度 9.0%、1993（平成 5）年度 8.0%、1998（平成 10）年度 7.3%、2003（平成 15）年度 5.7% となっている（那智勝浦町 2006: 131）。

文献

地図情報センター

2006『地図で知る平成の市町村大合併・総集編』東京：国際地学協会。

江口祐輔

2003『イノシシから田畑を守る－おもしろ生態とかしこい防ぎ方－』東京：農山漁村文化協会。

花井正光

1995「近世史料にみる獣害とその対策－獣類との共存をめざす新たなパラダイムへの観点－」河合雅雄・埴原和郎〔編〕『動物と文明』（講座「環境と文明」8）東京：朝倉書店、52-65 頁。

2003「亜熱帯の島の多様な猪垣－西表島の地域文化財としての猪垣とその活用の意義－」『地理』48(5): 94-101.

井上雅央・金森弘樹

2006『山と田畑をシカから守る－おもしろ生態とかしこい防ぎ方－』東京：農山漁村文化協会。

熊野列石研究会

1987『熊野の列石－熊野列石研究調査報告書－』和歌山県新宮市：熊野列石研究会。

那智勝浦町

2003『那智勝浦町町勢要覧 2003』和歌山県那智勝浦町。

2006『那智勝浦町第 7 次長期総合計画』和歌山県那智勝浦町。

n.d.『那智勝浦町統計資料 2006』和歌山県那智勝浦町。

那智勝浦町史編纂委員会

1976『那智勝浦町史』（史料編一）和歌山県那智勝浦町。

那智勝浦町史編さん委員会

1977『那智勝浦町史』（年表）和歌山県那智勝浦町。

1980『那智勝浦町史』（上巻）和歌山県那智勝浦町。

大宜味村教育委員会

1994『大宜味村の猪垣－猪垣調査報告書－』（大宜味村文化財調査報告書第 3 集）大宜味村教育委員会。

大分県教育庁文化課

2001『大分県のシシ垣－民俗文化財シシ垣調査報告書－』（大分県文化財調査報告書第 126 輯）大分県教育委員会。

岡本大二郎

1992『虫獣除けの原風景』東京：日本植物防疫協会。

齋藤 忠

1934「猪垣遺蹟考」『歴史地理』63(4): 1-17.

矢ヶ崎孝雄

1993「沖縄県下の猪垣（二）－沖縄本島－」『文教大学教育学部紀要』27: 1-16.

2001「猪垣にみるイノシシとの攻防－近代日本における諸相－」高橋春成 [編]『イノシシと人間－共に生きる－』東京：古今書院、122-170 頁。

柳田國男

1927「猪垣のこと－紀州熊野－」『民族』3(1): 154.

ゼンリン

2007『ゼンリン住宅地図』（和歌山県東牟婁郡那智勝浦町太地町）北九州市：ゼンリン。

[はまぐち ひさし 文化人類学]

[とりい かずひさ 体育学]